

# 「自立」はいかに語られるのか —高学歴未婚女性の語りに基づいて—

郭 麗 娟  
(人間発達科学専攻)

## 1. 研究の目的と背景

本稿は、高学歴未婚女性は自身の「自立」をどのように認識し解釈しているのか、また彼女たちはそれをどのように語るのかを、彼女たちを直接取り巻く社会関係と背景にある社会規範との関連で明らかにすることを目的とする。

従来の若者の自立論は、「成人期への移行」という文脈で捉えられてきた。ライフコース論では、この「移行期」は学卒、就職、経済的独立、離家、結婚（親になる）などのイベントを経験する時期と想定されている（岩上 2010: 10）。近代産業社会の構造的背景のもとで、若者は学卒後直ちに職業世界に移行し、経済的な自立をスムーズに達成した。その数年後結婚し、大人への移行が完了するとみなされていた。しかし、高等教育の大衆化により、多くの若者が20代半ばまで学校で過ごすようになった。学卒年齢の上昇は若者の労働市場への参入時期を遅らせるだけではなく、親への経済的な依存も長期化することを意味する。近年、若年層を中心に非正規雇用の勤務形態が増加し、若者が長期的に不安定な状況に置かれるようになった。また、未婚化・晩婚化への関心が高まり、学卒をしても親元にとどまる未婚子の存在が社会的に批判されるようになった。この現象に対して、若者の「離家の遅れ」を「自立の遅れ」とみる視点が代表的である（宮本・岩上・山田 1997; 宮本 2002）。

しかし近年、若者のライフコースが多様化・複雑化しており（宮本 2004）、就職・結婚したら社会的に自立し、一人前の大人になるとはもはや言えなくなった。とりわけ、女性の高学歴化に伴い、女性の間でキャリア志向が高まり、その結果、現在30代前半の女性でも、四人に一人が独身者であると言われるほどである。しかし彼女たちはなお根強い「女性の幸福は結婚にある」といった通念との間で葛藤を感じてはいないのだろうか？本稿は、高学歴未婚女性を対象とし、未婚化・晩婚化が進んでいる現在において、彼女たちは自分自身の「自立」をどのように捉えているのかを探りたい。

## 2. 先行研究

かつての発達心理学において、「自立」の問題は幼児期から青年期までの世代に限定して考えられてきた。渡邊（1995）は幼児期・児童期の身体的・行動的自立が課題であるのに対して、青年期は精神的自立が最も重要として、この時期には、親からの心理的離乳・離脱・独立、そして自我の発見と再構成による主体的な自己確立が重要であると指摘する。一方、青年期から成人期への移行期である学卒後から結婚するまでの若者は、「大人でも子どもでもない」「半依存・半自立」のグレイゾーンとされ、独立した研究対象となることは少なかった（水本 2009）。

「自立」の定義は研究者によって様々である。福島（1997）は、「自立」の概念は使用する人や使用のされ方・その対象によって内容が異なり、自律、独立といった言葉と混同されて使用されてきたために、曖昧であると指摘する。自立の下位概念について、久世（1980）は「身体的自立」、「行動的自立」、「精神的自立」、「経済的自立」、また、深谷（2000）は、「身辺的自立」、「経済的自立」、「精神的自立」、「社会的自立」を区分している。身体的、行動的自立は幼児期における基本生活習慣の獲得が主要な問題となっており、精神的、経済的自立は青年期を迎えてからの問題とされる。これらの研究では、子どもと青年期の自立が中心であり、学卒後から結婚するまでのステージを視野に入れていない。

社会学においては、宮本ら（宮本・岩上・山田 1997）が、1990年代初め、「シングル貴族」と言われていた都市部中流階層の親と同居する成人未婚子の実態を明らかにし、この若者たちを支えているのは経済力のある彼らの親たちと、子どもにはできるだけのことをしてやりたいという「『子どものために』イデオロギー」<sup>1</sup>であることを指摘している。後に、「パラサイト・シングル論」（山田 1999）で、「経済停滞と少子化など不安要因の“元凶”として、豊かな時代に成長して、いつまでも親に寄生し自立しない若者」がバッシングされるようになった。とりわけ、母親と娘は

心理的距離が近く、親密な関係を築くものとされる(Chodorow 1978 = 1981)。日本においても、母娘の親密関係が大変強いとの指摘がなされ(山田 1999)、母娘は相互依存の関係として議論される傾向にある。

90年代初めの若者の自立問題は、安定した雇用を背景に、若者は収入があっても生活全般が親の保護下にあるため、経済的に自立していないと感じられる。10代の頃からの親子の役割関係が基本的には転換をすることなく持続している構造が、経済的にも精神的にも自立していないと若者たちに感じさせている大きな要因であるとされる(岩上 1997: 67)。親の豊かな経済力と子への愛情が、若者の親からの自立を困難にしていることが読み取れる。また、親密な関係性が前提とされ、相互依存の関係性という視点から母娘関係を捉える傾向が、成人した娘の自立を不問に付し、親からの自立困難を説明する手助けとさえた。一方、90年代半ばになると、就職難の時代が到来し、大学を卒業しても定職に就けない若者が増えた。非正規の雇用形態が若者の間で増加し、とりわけ女性において顕著である<sup>2</sup>。経済的に不安な立場に晒されるようになった若者が「自立できない」「不安定な層」として注目され、彼らを支える社会システムの確立の必要性が提起された(宮本 2002)。90年代初めの若者の自立をめぐる議論と比べ、後の議論では、社会構造が若者の経済的自立を困難にしていることを強調される点が特徴的である。

このように、若者の自立問題では経済的な自立が焦点化され、研究者側のコンセンサスとなった。このことの背後には、研究者側に「成人した子どもは自立すべきだ」という暗黙の了解が存在(米村 2008)し、この時期の若者の自立は当然だという認識がある。そのため、90年代初めの親元に同居する「シングル貴族」は「自立していない」状態を不快とは思わず、生活の責任が免除されている状態は魅力ある選択肢となるので、自立できないのではなく、自立したくないのだ(岩上 1997: 69)と指摘されたのである。若者批判がある一方、若者の自立困難にはどのような原因があるのかについては、個人の自己責任に帰する見方(玄田 2001)、現行の教育では若者に必要な労働スキルが身に付かないとの指摘もみられる(本田 2009)。他方、若者を自立させるための国レベルの対策も実施され<sup>3</sup>、社会政策的なアプローチも試みられるようになった(社会政策学会編 2005)。

これらの社会学における若者の自立問題の議論では、経済的自立が焦点化され、その背後には、「男は仕事、女は家庭」と考えられてきたジェンダー規範が作用しているため、女性の自立が無視されてきたと言える。このことは、女性がこれまでの若者研究・青年研究ではほとんど研究対象になっていない(小谷 1993)という心理学の自立モデ

ルの視点とも一致する。今日、女性の社会進出とともに、経済的自立を達成することは女性にとっての目的だけではなく、職業を通して、社会とつながり、自分のキャリアを高めることも求められるようになった。ところが、性別分業がまだ根強い日本社会では、男性は経済的自立が期待され、女性は結婚が期待される(多賀 2005)中、キャリアを追求することと家庭を築くことの間、葛藤を感じる女性が多いと思われる。公的領域と私的な領域の間に、女性たちはいかに自分の人生を設計しているのだろうか。彼女たちにとっての「自立」はどのようなものだろうか。本稿は、高学歴未婚女性の視点から、「自立」の意味を探りたい。

### 3. 調査の概要

調査は2011年1月から5月にかけて、調査者の友人の紹介を通して、スノーボールサンプリング方式で、東京都に在住する20代後半～30代後半の未婚女性9名に個別に2時間ほど半構造化インタビューを実施した。調査は都内のカフェや調査者の自宅や対象者の自宅で行われた。調査対象者は首都圏及び首都圏近辺出身の方もいれば、地方出身の方もいる。全員は大卒以上の学歴を有し、うち大学院卒が3名いる。年収が350～500万円5名、500万円以上4名おり、高収入でキャリア女性が多数を占めている。また、帰国子女が3名いる(Aさん、Bさん、Dさん)。対象者の属性は表1を参照されたい。

調査内容は成人未婚女性の職業観、結婚観、理想とするライフコースと親子関係を中心に、質問リストに沿って語ってもらった。また、会話の流れに沿って、調査者が適宜に質問をし、回答や解釈を求める場合もあった。インタビューの内容は調査対象者の承諾を得た上で録音し、調査実施後、全ての対象者の録音内容を文字データに変換し、逐語記録を作成した。インタビューデータの分析は逐語記録に基づいて行われた。なお、本調査はお茶の水女子大学グローバルCOEプログラムの研究助成を受け、同倫理委員会において調査の認可を得ている。

「自立」についての尋ね方は以下の二通りで行われた。まず、調査者が質問する以前に、対象者自から「自立」を語り出した場合があった。この際に、調査者は「さきほど自立という言葉がありましたが、改めてそれについてどのようにお考えですか」と質問をした。また、調査者が「自立についてどのようにお考えですか」、「ご自分自身の自立について、どのように考えているのか」という質問を投げかけ、「自立」への解釈を求める場合もあった。

表1 調査対象者の属性

対象者	年齢	出身	最終学歴	職業	年収	家族構成	居住形態
A	29	東京都	四大卒	保険会社社員	400万弱	父親62 会社員(海外赴任経験あり)→50代リストラ→無職 四大卒 母親59 会社員→専業主婦→翻訳会社成立 四大卒 姉32 結婚 四大卒	近居(交通手段を問わず30分以内)
B	28	東京都	大学院卒	プログラマー	1000万前後	父親57 会社員(海外赴任経験あり) 四大卒 母親 亡くなった 専業主婦 四大卒 妹27 会社員 四大卒 未婚	
C	29	神奈川県	四大卒	出版社社員	360万	父親66 出版社退職 四大卒 母親65 個人塾講師 四大卒 姉38 既婚 姉34 既婚 専業主婦	
D	29	アメリカ	四大卒	大手電子会社社員	600万以上	父親66 会社員→退職 四大卒 母親60 専業主婦 四大卒 姉35 既婚→専業主婦 四大卒	
E	29	東京都	四大卒	広告会社社員	430万ぐらい	父方祖母 父親62 企業研究者 四大卒 母親61 小学校教員→専業主婦→中学校教員(非常勤) 妹25 事務員 未婚同居	同居
F	30	兵庫県	四大卒	保険経済アナリスト主任	600～700万	父親63 レストランオーナー 四大卒 母親55 看護師→専業主婦→看護師(パート) 専門学校卒 姉33 結婚 高卒	別居
G	30	富山県	大学院卒	会社員	400～500万	父親69 住職 3年前亡くなった 母親62 専業主婦 塾講師→住職	
H	30	青森県	四大卒	建設会社社員	350万ぐらい	母方祖父76 建築関係 母方祖母76 専業主婦 父親57 会社員 中卒 母親53 保育士 短大卒 弟28 福祉関係 専門学校卒 親元同居	
I	39	愛知県	大学院卒	国連関係	1000万前後	父親72 サラリーマン 四大卒 母親73 小学校教師→退職 四大卒 姉42 既婚 親近所居住 姉41 既婚 愛知県在住	

#### 4. 語りの分析<sup>4</sup>

「自立」をめぐる語りは多様であった。本稿は「自立」をめぐる語りのキーワードをKJ法により分析し、帰納的に三つのカテゴリー、すなわち、「生活面における自立」、「精神面における自立」と「経済面における自立」を見出した。この三つは久世(1980)と深谷(2000)の「自立」の下位概念とも一部符合する。対象者たちは「自立」を語る際に、しばしば身近な他者である友人や同僚や親などを比較対象として取り上げる傾向が見出されたため、この点にも留意しつつ分析を進めていく。以下に提示する語りでは、「自立」の三側面が同時に語られる場合が多いため、各側面を重視しつつ、それぞれの関連についても分析を試みる。なお、以下の引用部分は原文を用いるが、説明を要する部分には筆者が( )内に言葉を補っている。

##### 1) 生活面における自立

調査対象者の語りの中には、食事や家事など日常生活の世話を親に任せることや、その前提にある親との同居に強い負い目を感じる語りがみられた。東京都出身の29歳のEさんは大学も勤務先も東京にあるため、28歳まで家を出るきっかけがなかった。一人暮らしを始める友達が増えることによって、実家暮らしのEさんは「自立していない」という感覚を持つようになった。そこでEさんは自分の収入で「衣食住一通りできるかどうかを試す」ため、1年半一人暮らしを経験した。この経験を通して、Eさんは自分の収入で「生活が成り立つ」ことを実感したと同時に、一人暮らしは実家暮らしより「すごいお金がかかり」、「友達との付き合いも」減らさなければならないといったネガティブな側面にも気付き、再び親元に戻った。次の語りは、Eさんが一人暮らしの前に親元に同居していた時のことを

振り返りながら「自立」に触れたものである。

E：27歳ぐらいすぎると、東京の女の子が結構結婚が遅いけど、結婚しはじめて、一人暮らしを始めて、家を出る友達がすごく増えて、自分だけずっと高校生の時とおなじような生活をしているのが、自立していないような感じがして。

Eさんは親元を離れる友達を比較の対象として挙げ、生活面における「自立」を語った。社会人になったEさんは「朝ご飯は何食べたいとか」といった親の世話に「嫌だった」ため、一人暮らしを実行したのである。

東京都出身のDさんは生活面で親に世話され、自分は何もできないことに「焦り」を感じ、入社後2年目、親に反対されたにもかかわらず、「勝手に契約して（家）を出て行った」。彼女は独身生活が継続していた調査時に、親元に同居していた時のことを次のように語った。

D：いろんな国のお友達がいて、生活していて、ホームパーティに行くと、（友達が）料理が作れたり、（私は）家事も食事も作れない、そういうのが懂れて、焦りが一番大きかった。

Dさんは「家事も料理もできない」自分を、一人暮らしの友達と対比しながら語っていた。親との同居時には、専業主婦の母親だけでなく、退職後の父親も「結構家事好んでやるんで、私が出る幕が全然ない」状況であり、まず家事や食事といった生活面の自立を果たしたいという願望が強くあったものと思われる。

EさんとDさんが感じていた「嫌」、「焦り」は、成人になったにもかかわらず子どものように扱われることに対する感情として理解できる。生活面における自立を達成するために、二人は親元を離れることを選択した。その際に、経済力が彼女たちにとって、離家を実現させる決定的な要因であった。Dさんの年収（600万円以上）からすれば、都内で一人暮らしをするのに十分であるため、一人暮らしの間に、「親から経済的なサポートが必要ではない」と語られた。一方、Eさんの年収（430万円ぐらい）はDさんほど豊かではないが、一人暮らしの生活を実現させた。しかしその生活は「お金がかかる」ゆえに、交友面にネガティブな影響があり、1年半で打ち切られた。東京都の住宅費が全国トップであるため、一定の経済力を持っていなければ一人暮らしの実現が困難であり、たとえそれを始めたとしても継続は厳しい。それゆえ、Dさんは一人暮らしを継続できたのに対し、Eさんは最終的に親元に戻ることを選択したのである。

経済力の重要性を認識しつつ、「生活すること自体」の大切さを語った人がいる。都内で一人暮らしをしている地方出身のHさんは、大学進学とともに親元を離れた。

H：（自立は）すごく大きいことじゃなくて、やっぱり自分のことを自分で世話できるっていうか、経済的なことでもそうですけど、生活すること自体を理解してるっていうんですか。

H：私は仕事していることだけでは自立とは思ってなくて、仕事してるだけじゃないと私は思ったりするところがある。やっぱり（親元に生活している人たちは親に）世話をしてもらってるんですよね、おうちに帰ったら。それは自立してるとは思ってない、お金は稼ごうが。

経済的な自立をしても、親と同居して生活面において世話をしてもらってれば「自立」しているとはいえないと、Hさんは親元同居成人子を批判的に見ていた。幼少の子どもが親に扶養されるのは自然なこととされるのに対し、成人したら自分のことは自分ですべきという意識が高まり、親に扶養されることは自明のことではなくなるのである（宮本 2004）。

ここでの「自立」をめぐる語りでは、一人暮らしの人（Hさん）は親元に同居する人を、親元に同居していた人（Eさん、Dさん）は一人暮らしの人を比較の対象とすることによって、「親元同居≠自立」という図式が出来上がっていた。すなわち、そこには「離家の遅れ」を「自立の遅れ」とみる視点がある。宮本（2004）は、親の家を離れることは、初就職、経済的自立と並んで、成人期への移行プロセスにおける重要なイベントであり、自立への最初の象徴的なステップであると指摘している。地方出身のHさんは進学に伴い親元を離れ、生活面の自立をより早い時期に獲得した。一方、進学、就職のために離家する必要のない大都市では、若者の離家時期は遅く、特に女性の離家年齢が上昇する傾向にある（国立社会保障・人口問題研究所 1996）。EさんとDさんの場合は、この大都市の特徴以外に、子どもが成人になっても、世話を焼き続ける親の存在も、その生活面の自立を困難にする要因として捉えられていた。

## 2) 精神面における自立

調査対象者たちは「自立」を語る際に、「性格」、「自分の信念」、「自分の意志」、「自分の意見」といったキーワードを用いる傾向がみられ、この種の語りを「精神面における自立」と分類した。39歳のIさんは「自分の意見はもともと持ってるほうだし結局自分で決める」と語り、Dさ

人も誰にも依存しない自分の性格を語った。

D：(自分は自立) してると思います。そんなに悩みとかが、あったらいつも相談して聞いてほしいっていうほうでもないですし、あんまり人に依存する性格じゃないので、経済的プラス、精神的にも、周りに人がいたらいいで、いなかったらいいで済むみたい。

Dさんは「いつも悩みを聞いてほしい」、「人に依存する性格」という人を比較の対象として意識し、自分をその対極の「自立している」カテゴリーに位置づけようとしていることがうかがえる。

調査時に、Aさんは美術を学ぶため、6年間勤めていた会社を辞職し、専門学校に進学することを決意した。

A：私もそうだけど、私が行ってた高校って、すごい自立した女が多いですね。(略)強い女の子が多い、芯が強いっていうか、一つの何かの自分の信念を持って、がんばれる子が多い。(略)子どもができて、ちゃんとみんな子育てもできるし、旦那さんも大事にしてるけど、万が一そういうのがなくなっちゃったとしても、仕事を見つけて、生活していける力を持ってると多いと思う、そういう意味では精神的には自立していると思います。

精神的に「自立」しているからこそ、頼れる対象がいなくても、「仕事を見つけ、生活していける」同級生が取り上げられていた。実際、Aさんは「このまま今の会社で働き続けてもいいんだけど」と特に辞職の理由があったわけではないが、自分のやりたいことをしっかりわかった上で、進路を自ら方向転換させたところに、彼女が精神面の自立を重視していることがうかがえる。彼女は、「自立した女」というカテゴリーに自分を位置づけ、「自立した自分」を提示しようとしていることが読み取れる。

地方出身のGさんは都内の食品会社で働いている。経済的な自立を前提としながらも、自分の意志で生活することを「自立している」根拠として語った。

G：経済面は誰かの援助を受けるわけではなく、自分で働いて、得たお給料の中で生活できるようにしてるので、経済面では自立していると思いますし、いろんな日常生活にしても、自分でこうしたいっていうのを反対されることなく、自分で決めたように、日々生活しているので、自立できていると思います。

Gさんの父親は何年前に他界し、専業主婦だった母親が父親の住職の仕事を受け継いだという。Gさんは母親の変化を取り上げながら、経済力を持つこと、そしてそれによって自己決定が獲得されることの重要性を語った。

G：最近母が言うのは、専業主婦だった時と、今自分でお寺の住職っていう形でお仕事を持ってるとで、やはりお金に対する価値観が変わっていて、(略)やはり父の稼いだお金を使うときには、何でも父に許可を取るっていうか、今は自分で稼いだお金なので、それをどう使うかはもう自分の意志で決められるんで。

専業主婦だった母親は経済力がないため、「何でも」夫に「許可」を取らなければならなかったが、経済力を持つようになると、「自分の意志」で行動できることが語られた。Gさんの母親にとって、経済面の自立は精神面の自立を決定する側面がみられる。Gさんは女性の自立を語る際にも、経済力を自分の意志で生きる上に重要なものとして認識した。

G：自分の生活を誰かに頼るわけじゃなくて、自分で働いたお金で、自分の生活をする。自分の生き方を誰かに指図、あなたは家にいなさいとか、こうしなさいあしなさいっていう命令なり、何か言われてそれに沿って生きていくんじゃないで。自分で、私はこうしたい、私はこうやって食っていくのを、自分の意志で生活なり生きていくっていうのが女性の自立っていうことなのかなと思います。

以上のようなGさんの語りから、働くことによって経済的な自立が獲得され、その結果、自己決定が可能になるという論理が読み取れる。一方Aさんは、精神的に自立していることは、「仕事を見つけて」という経済面の自立につながると語った。経済的自立と精神的自立は互いに独立した関係ではなく、影響しあうものと認識されている。性別役割分業規範の下で、女性は家庭内役割の担い手とされ、経済的に夫に扶養される支配的な文化が長らく存在している。Gさんは母親の人生をふりかえ、経済的な自立が女性の自己決定にいかに関わる重要な意味を持つものであるのかを認識したのではないだろうか。

### 3) 経済面における自立

若者の自立論では、正規雇用の軌道からはずれ、経済的に不安定な立場に立たされる若年層の増大が問題視されている。経済的な自立困難は若者を親に依存させ、親からの

自立をますます困難にさせるといった悪循環を生じさせる。本稿の対象者たちは高学歴・高収入である点に注意したい。1) と 2) で見てきたように、対象者たちは生活面・精神面では自立している・しようとしている自分を呈示する点で共通している。親の世話から脱却するためにも、自分の意志で生きるためにも、経済力が必要不可欠であることが分かった。本項目では、対象者たちは経済面の自立をいかに語るのかをみよう。

外資系企業に勤務している Bさんは給料の高い同僚を自立した存在としてみていた。

B：私の会社って、自立した女性が多くて、外資だからか、給料も結構高めなんですね、めっちゃめっちゃ自立して強い女性が多くて。

Hさんは母親を比較対象として挙げ、経済面における「自立」を語った。Hさんは大学に進学したが専門に興味が湧かず、別の大学に入りなおそうとしたが、父親や祖父母に反対される中、母親に応援された。母親の経済力こそがHさんに大学に入りなおすことを可能とさせたのである。

H：彼女は経済的にやっぱり仕事をしてて、まあ自立してるってのはあるので、決定権がやっぱり経済的な力があるようで。

Fさんは母親を比較対象として、資格を持つこと、それによって働けることを「自立」として捉えていた。

F：看護婦って資格をもって、年がいても働けて、いざという時に、すごいいいな一と思って、私がもともとなんか自立心が強くて、何か言ってたように。小さい頃から、(略)資格をもって、いつでも公職を得られるような、自分の中で積み重なってきたものを揺るがない、ものをもってたいのが、すごいあった。

Fさんは自分から自立を語り出した。そのトピックは母親の変化についてであった。Fさんが中学生まで母親は専業主婦だったが、結婚前持っていた看護師の資格を活かし、再度仕事をするようになった。仕事復帰するまでの母親が「ネガティブ」だったり、「落ち込んだり」していたが、復帰後の母親が「すごい元気になった」。母親の変化を見て、Fさんは資格を持つこと、それによって仕事を得られたことに肯定的な認識をもつようになった。資格という「揺るがないもの」の獲得によって、保険経済アナリストという「公職」を得たFさんの現状そのものが、Fさんにとって

の「自立」ではないだろうか。

3人の語りを見てきたように、仕事することによって、経済的な自立が可能になり、さらに自己決定権につながる(Hさん)。経済的な自立は対象者にとって肯定的な意味合いをもつようである。しかし、経済的な自立ゆえの戸惑いや「不利」といった語りも見られた。

出版社社員のCさんの語りから、女性が経済的な自立を維持するために、結婚を遅らせたり、家庭を犠牲にする上司を見て、仕事と結婚の間で葛藤する心情がうかがえた。

C：最近では自立してる女性が多いと思います、自分で稼いで、その分結婚が遅れる。

C：自分自身はすごく自立してると思う。自立してると思うけど、思うけど、あんまり自立しすぎのもよくない。(略)最近では年のせいで、(仕事は)どこまでいっていいだろう、考えるようになって。結婚して幸せもほしいけど、バリバリ働く(こともしたい)、でもバリバリ働いてる上司を見ても、未婚か離婚。(略)やっぱり女の人がバリバリ働いてると、バランスが取れない。私結婚しようかな。

Bさんは、年収の高い女性の結婚市場における「不利」を語った。

B：実はだから稼いでいるからこそ不利で婚活とかに(略)それは日本の現状というか、うちの会社の女性が非常に結婚が難しく、7割の年上の女性がシングル率が非常に高い。

さらに、Bさん自身は、「稼いでいるからこそ結婚に不利」という理由で、友人に「お給料の稼げないところに転職して」と勧められ、「納得しちゃった」と語った。しかし一方、結婚相手を見つけるために、給料の低い会社に転職することを「今は考えていない」といった矛盾する語りも見られた。CさんとBさんの語りから、経済的な自立を維持するために働くこと、また、男性より経済面が恵まれていることは、未婚女性が結婚を考える際に一つの障碍となっているようである。非正規雇用の女性は収入の高い男性を求め、安定した収入を得る若年男性が減少していることが未婚化の原因であると指摘されている(山田 2010)。一方、安定した高収入を得る未婚女性は、経済力が男性より優位であるため、結婚の困難を経験している。いずれも「男性優位」の社会規範が反映されていると言える。

## 5. 考察

本稿は、高学歴未婚女性は自身の「自立」をどのように認識し解釈しているのか、また彼女たちはそれをどのように語るのかを、彼女たちを直接取り巻く社会関係と背景にある社会規範との関連でみてきた。語りの分析を通して、以下のことが明らかになった。

第1に、対象者たちは身近な他者である友人や、同僚や両親などと比較しながら、生活面、精神面と経済面における自立を解釈しようとする傾向がみられた。例えば、生活面の自立に関しては、一人暮らしの人（Hさん）が親元に暮らす同年代の人を「自立しない」カテゴリーに位置づけることによって、「自立している」自分を呈示した。一方、親元に同居していた人（Eさん、Dさん）は一人暮らしの友人を「自立」した存在とみなしているため、自分を「自立していない」と実感した。精神面の自立に関しては、精神的に自立している同級生を比較対象に挙げたAさん、自分と反対の類の人を比較対象に挙げたDさんは、自分を「精神的に自立している」カテゴリーに位置づけさせた。また、自分の母親の変化を取り上げたGさんは、経済力を持つこと、そしてそれによって自己決定が獲得される重要性を語った。さらに、経済面の自立について、対象者たちは同僚や母親を比較対象として取り上げ、経済力を得たことによって、「日々の生活」だけではなく（Gさん）、女性として生きていく上での「自己決定権」をも可能にすることが示唆された（Hさん、Gさん）。調査対象者たちは身近な他者を比較の対象とし、「自立」という個人的な経験、または「自立」に対する個人的な理解と認識が明らかになった。個人は社会関係との関連から自分の「自立」を解釈し、評価しようとするが見いだされたと言えよう。

第2に、自立の三側面の相互関係が明らかになった。高学歴、かつ高収入の調査対象者たちは、先行研究で指摘されてきた経済的自立困難を経験している若年層と異なる特徴を持っている。経済力があるため、親元を離れ一人暮らしの実践が可能になり（Dさん、Eさん）、「決定権」を生み出し（Hさん、Iさん）、女性として生きていく上での自己決定（Gさん）を可能にするといった語りもみられた。親元に同居していたEさんとDさんは同世代の女性と比べ格段に高い収入を得ているが、親元に暮らしているため、食費も住居費も光熱費も、生活全般が親の保護下にあり、経済的に自立への実感を持ちにくい（岩上 1997:66）。また、大人になっているにもかかわらず、食事や家事など日常生活で親に世話をしてもらうことに、対象者たちは強い負い目を感じており、生活面の自立を獲得しようとする願望が強くみられた。そこで、離家が選択された。しかし、東京都の住居費が全国トップとなっており、一人暮らしをする

ためには、十分な経済力が必要となる。安定した職業につけられない「不安定な」若者は、経済的自立が困難なため、離家することができず、親元同居がそれを対処する戦略とされている（宮本 2004）。しかし、本稿の対象者たちは高い経済力を持っているゆえに、離家を実現した。一人暮らしの経験によって、自分の収入で生活が「成り立つ」ことを実感し、家事・料理も自分で「やるようになり」、生活面における自立意識を獲得したと考えられる。自立の三側面は互いに影響しているプロセスが明らかになったと言える。

最後に、高学歴未婚女性たちが語る「自立」の三側面にはジェンダー規範が強く作用していることが確認できた。生活面では、親元に同居する成人未婚娘は、大人になったら自分のことは自分ですべきという意識が高まり、親に世話される役割に後ろめたさを感じていた（Dさん、Eさん）。福島は（1997）「男性としての自立」は「独立」が重要とされる一方、「女性としての自立」は、掃除・洗濯・炊事といった身の回りのことに関する「身辺自立」の重要度が高いと指摘し、その男女における相違が、「男は外、女は家庭」といった性別役割分業に根差していると解釈している。本稿の対象者たちも、家事・料理といった女性的な役割規範が強く内面化されたために、親に世話されることに対するネガティブな感情を引き起こしたと解釈できる。さらに、家庭内では、母親が主な担い手であり、成人した子どもの世話を焼き続ける子ども中心主義的な近代家族規範もうかがえたと言える。精神面では、母親を比較対象として挙げ（Gさん、Hさん）、自己決定における自立を重視していることがうかがえたものの、もっぱら男性に稼得役割を配分してきた支配的な文化において、母親の世代は経済的な依存者であるため、発言権が弱く、抑圧されてきた対象であることが示唆された。親が生きた時代とは違って、高学歴・高収入の対象者たちは「自分の意志」と「自分の意見」を持っており、自分の人生を自分で決め、一個人として生きていくことができると語られた。また、経済面では、調査対象者は経済力があるからこそ、一人暮らしが実現できたが、離家に対して親は反対の態度を示した（Dさん、Eさん）。調査対象者は経済的自立を獲得しても、離家することが奨励されず、その背後には、成人した娘を結婚するまで手元においておきたい親の願望がある。若者の離家の規範の強い欧米諸国と比べて、日本は、成人した子ども、とりわけ、成人娘を離家させる社会的な規範が弱いことが示唆された（宮本ら 1997）。また、男性に稼得役割を付与する強い社会文化規範の下で、経済的自立を維持するために（Cさん）、仕事と結婚の間で葛藤する語りがみられた。また、男性より経済的に優位である場合（Bさん）、結婚市場において「不利」な立場に立たされやすいことが

語られた。稼得役割を担ってきた男性にとって、経済的自立は家庭を作る前提であり、仕事を続けることは家庭生活を維持する上に必要不可欠である。一方、本稿の対象者のBさんの語りから、経済的に自立していることは、結婚し、家庭を作る際に「不利」といった状況さえを生じさせる。勿論、結婚について、他の対象者から「どっちかという、私はあんまり結婚したいのが実はないんですよ、それなりに楽しんでるし」(Hさん)、「新しい人と一緒に暮らすことで、自分のライフスタイルが崩されるのが耐えられない」から、「最近結婚しなくてもいいやと思っちゃいます」(Gさん)との語りもみられたように、一部の対象者たちは結婚に対する願望が必ずしも強いとは言えない。経済的自立を手に入れたことは、男性に頼る必要性を減少させ、女性により多くの人生選択を与えることになる。そのため、結婚後、家庭に入り、経済的に夫に依存するといった結婚に対する規範意識が対象者たちに内面化されたため、結婚への必要性を強く感じていないと考えられる。しかし、年齢が上がるにつれて、自由な生活に対する危機感も語られた。39歳のIさんは、結婚していないことを「自立していないように見える」と語りながら、「やっぱり早く結婚して、普通の幸せ、普通の家庭を築きたい」と、結婚生活への願望を語った。山田(2010)は、日本の結婚難を、女性の期待に見合うだけの経済力を持つ男性の数の減少と指摘している。これは、非正規雇用に従事する若年女性だけではなく、キャリアウーマンにも当てはまる。男性は自分が低収入でも結婚してくれる女性が現れると信じ、女性は年収が高い男性と出会えると信じている。その認識のギャップを埋める必要性が問われている(山田 2010)。しかし本稿では、経済的な自立を獲得した対象者たちは母親世代より、一個人として生きる自由を選択できた反面、個人の幸せとされる結婚が遅れ、最終的に、「女性の自立は結婚である」という「男性が仕事・女性が家庭」を前提とする社会規範に回収される現実の一端を提示できたと言えるのではないだろうか。

## 6. 本研究の限界と今後の課題

本稿は、高学歴未婚女性の視点から「自立」の意味を探ってきた。調査対象者が高学歴・高収入という高い社会階層に偏っているため、ここで取り上げた9名の語りを一般化することはできない。しかし、「自立」をめぐる語りから、未だに根強く存在している性別役割分業規範の中、仕事による自立と、結婚による自立の間に葛藤を経験する一部の都市部高学歴未婚女性たちが直面する現実と問題点を提示できたと言える。若者の格差が拡大しつつあると言われていた中、非正規雇用の未婚女性の「自立」とはどのよう

なものか、そこでどのような問題点があるのかを見ていく必要があるだろう。また、ライフコースの視点から、今後、同じ対象者に追跡し、結婚、出産といったライフイベントを経験することによって、「自立」の語り方と内容がいかに変化していくのかを捉えることも今後の課題としたい。

### (謝辞)

本調査にご協力いただいた方々、ならびに様々な形でご助言を下さった皆様に、心より感謝を申し上げます。

### (注)

- 1 山田は『未婚化社会の親子関係』の第3章で次のように定義している。現代日本社会に生きているわれわれにとっては、母性愛をはじめとして、「親は子どもをかわいいと思うはず」「親は、子どものために何でもしたくなるはず」「親は子どもに尽くしたがるはず」といった考え方は、「当たり前」の考え方にみえる。逆に言えば、「子どもをかわいいと思わない親」、「子どもより自分のことを優先して考える親」「子どもに尽くそうとしない親」は、あってはならない存在として非難されたりする。このような考え方を「子どものために」イデオロギーと呼んでおく。
- 2 パート・アルバイト・派遣・契約・嘱託といった非正規労働者の割合が男女とも上昇している。1990年非正規労働者の割合は男性では15～24歳(20.0%)、25～34歳(3.2%)のに対して、女性では15～24歳(20.6%)、25～34歳(28.1%)である。2011年になると、男性では15～24歳(49.1%)、25～34歳(16%)、女性では15～24歳(51.3%)、25～34歳(39.7%)である。2010年「社会実情データ図録」非正規雇用者比率の推移男女年齢別 (<http://www2.ttcn.ne.jp/honkawa/3250.html>2011.10.27)。
- 3 例えば、2003年の「若者自立・挑戦プラン」が国レベルからあげた若者自立支援・就職支援の一つである。
- 4 語りの引用に関しては、本文における短い引用は「」にて挿入し、2行以上にわたる場合は段落を改めた。

### (文献)

- Chodorow, N., 1978, *The Reproduction of Mothering : Psychoanalysis and the Sociology of Gender*, University of California Press (大塚光子・大内菅子訳, 1981, 『母親業の再生産』新曜社).
- 深谷和子, 2000, 自立とは何か——身辺自立, 経済的自立, 精神的自立, そして「社会的自立」『児童心理』726:11-16.
- 福島朋子, 1997, 「成人における自立観——概念構造と性差・年齢差」『仙台白百合女子大学紀要』創刊号:15-26, 仙台白百合女子大学.
- 玄田有史, 2001, 『仕事のなかの曖昧な不安——揺れる若年の現在』中央公論新社.
- 本田由紀・筒井美紀編著, 2009, 『仕事と若者』日本図書センター.
- 岩上真珠編著, 2010, 『〈若者と親〉の社会学——未婚期の自立を考える』青弓社.
- 久世敏夫・久世妙子, 1980, 『自立心を育てる』有斐閣.
- 国立社会保障・人口問題研究所, 1996, 『第4回人口移動調査』.
- 宮本みち子・岩上真珠・山田昌弘, 1997, 『未婚化社会の親子関係』有斐閣.



- 宮本みち子, 2002, 『若者が《社会的弱者》に転落する』洋泉社.  
——, 2004, 『ポスト青年期と親子戦略——大人になる意味と形の変容』勁草書房.
- 水本深喜, 2009, 「青年期から成人期への移行期の親子関係——特に母娘関係に焦点を当てた研究の展望」『青山心理学研究』, 9:71-82.
- 小谷敏, 1993, 『若者論を読む』世界思想社.
- 社会政策学会編, 2005, 『若者——長期化する移行期と社会政策』(『社会政策学会誌』第13号) 社会政策学会本部事務局, 3-74.
- 多賀太, 2005, 「ポスト青年期とジェンダー」<特集> 後期青年期の現在『教育社会学研究』, 76, 59-75.
- 渡邊恵子, 1995, 「自立再考——女性の自立・男性の自立」柏木恵子・高橋恵子編著『発達心理学とフェミニズム』, ミネルヴァ書房, 77-101.
- 山田昌弘, 1999, 『パラサイト・シングルの時代』ちくま新書.
- 山田昌弘編著, 2010, 『「婚活」現象の社会学——日本の配偶者選択のいま』東洋経済新報社.
- 米村千代, 2008, 「ポスト青年期の親子関係意識——「良好さ」と「自立」の関係」『千葉大学人文研究』, 37: 127-150.

## How is “Independence” being Narrated? : From Interviews with Highly Educated Single Women

Lijuan GUO

(Human Developmental Sciences)

The purpose of this study was to explore what the meaning of “independence” is to highly educated single women.

From the standpoint of sociology, the understanding on “independence” of “transition youth” differs from gender. A man was expected as a breadwinner and a woman was expected to get married. In this model of understanding, “independence” has a strong gender ideology which means that a man is thought to be a breadwinner but a woman is thought to be financially dependent on the man. However, with the attainment of women’s higher education and the increase of women’s participation in social activities, more and more women have become financially independent. Some career women have a high position in society and even get higher incomes than men. I therefore ask that, nowadays, what is the meaning of “independence” to those highly educated single women?

In this study, I conducted semi-structured interviews of 9 highly educated single women in 2011 in Tokyo. Interviewees were asked for giving an interpretation of “independence” in the research. As a result, three viewpoints were clarified. Firstly, when interviewees gave an interpretation of “independence”, they usually took their coworkers, siblings and parents as comparisons. In comparison with those close others, the aspects of “independence” on mentality, finance and daily life were derived inductively. Secondly, the interaction among those three aspects of “independence” was clarified. For pursuing the independence on daily life, interviewees tended to leave the parental home. Their incomes helped them to achieve that aim. Through the experience of living alone, interviewees separated not only from parents’ financial dependence but also from parents’ daily life care. Living separately from parents made them have a full realization of what independence is on mentality. Thirdly, gender ideology is influencing those three aspects. As the domestic roles were only distributed to women, interviewees felt uneasy about being cared by parents in daily life. Their mothers’ generation had a lower self-determination because they were financially dependent on men. However, these daughters have acquired financial independence, and this has given them the self-determination to choose how they run their own lives. However, when daughters achieved financial freedom, they have felt less of a need to get married. Sometimes, having a higher income than a man accompanies some difficulties for the marriage.

**Keywords:** highly educated single women, independence, gender ideology, financial independence, self-determination